

赤坂親善大使 誕生月イベント開催！ ～発見のまち、赤坂～

- 平成27年2月13日(金)17:00ごろ
- 平成27年2月14日(土)11:30ごろ 赤坂地域商店街 各所ほか

2月はアユミン、アカサカメン、アカオくんのお誕生月です！ 赤坂では3人の誕生月をお祝いするため、クイズ大会、スタンパラー、記念写真撮影など、楽しいイベントを予定しています。ぜひご参加ください！



※イベント内容などは変更する場合があります。詳しくは下記連絡先までお問い合わせください。

●お問い合わせ／赤坂地区総合支所 協働推進課 地区政策担当
電話 03-5413-7013

港区の「区民交通傷害保険」への 加入をおすすめします

区民交通傷害保険とは、万が一の交通事故等に備えて、港区民のみなさまに少額の保険料でご加入いただける保険です。

平成25年の7月から施行された「東京都自転車の安全で適正な利用の促進に関する条例」にもとづき、自転車利用者は自転車事故に備えた保険加入の努力義務が定められました。

お申込み期間：平成27年2月2日から3月31日まで
(金融機関でのお申し込みは3月23日まで)
※上記期間以降は加入ができませんのでご注意ください。

- ご加入対象者は平成27年4月1日時点で港区にご住所のある方です。
- 保険期間は平成27年4月1日0時から平成28年3月31日午後12時までの1年間となります。前年度から継続して加入される場合であっても、新たに手続きが必要となります。
- 自転車を利用される方は、「自転車賠償責任プラン」を含んだコースへの加入をおすすめします。

(5) 保険会社／損害保険ジャパン日本興亜株式会社
承認番号：SJNK14-12172 承認日：2014/11/27

●お問い合わせ・お申し込み先／
赤坂地区総合支所 協働推進課 協働推進係
電話 03-5413-7272

この情報誌についての
ご意見・ご感想などを
聞かせてください

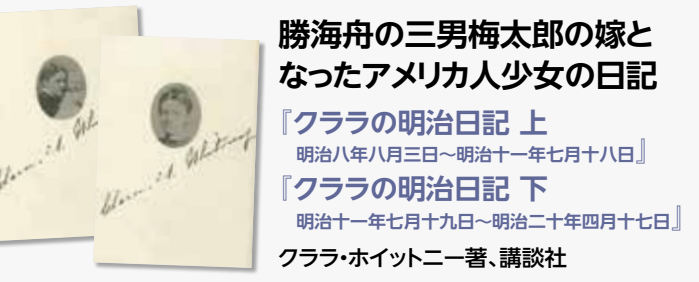
赤坂青山地域情報誌 第30号
平成26年(2014)12月発行
編集：港区赤坂・青山地区タウンミーティング
地域情報の発信・交流分科会
発行：港区赤坂地区総合支所協働推進課
〒107-8516 港区赤坂4-18-13
電話：03-5413-7013
FAX：03-5413-2019 (発行部数 23,000部)

図書館で親しむ赤坂・青山

北杜夫 三島由紀夫「戦後に書かれた 最も重要な小説のひとつ」と絶賛 『榆家の娘びと』

東京・青山の帝国脳病院院長・榆基一郎の一族とそれを取り巻く人びとの盛衰と衰微を、大正から昭和の終戦直後まで、ていねいに温かく描いた壮大な叙事詩です。祖父・斉藤紀一(基一郎)、祖母・ひさ、父・茂吉(徹吉)、母・輝子(龍子)、兄・茂太(峻一)など著者(周一)の精神科医一族がモデルです。山形の片田舎から出て大病院を創設した基一郎は、長女・龍子、次女・聖子、三女・桃子、それぞれに優秀な医者や婿にとろうと謀りますが……。

しっかり者で病院経営の実権を握るひさ、男勝りで気位が高い龍子、明るく飄々と生きる桃子、恋心を秘めつつ焼夷弾に美貌を灼かれる藍子(龍子の長女)と、女たちは凛として輝き魅力的な一方、男たちの駄目人間ぶりがユーモラスに語られます。舞台となる青山脳病院は大正13年(1924)の失火で全焼、資金難から世田谷区松原の原野に移転し、青山は榆脳病科病院分院として縮小し、さらに戦火で消失します。今、青南小学校付近の南青山4丁目跡地には、斉藤茂吉の句碑が建てられています。



明治8年(1875)、森有礼との縁で商法講習所の教師として招かれた父親にしがたが、14歳のクララは来日します。赤坂氷川町に住み一家への援助を惜しまない勝海舟家と親しみ、海舟の三男・梅太郎と結婚、一男五女をもうけます。クララは明治33年(1900)にアメリカへ帰国するまで、ノート17冊に及ぶ日記を遺しました。勝海舟一家との濃密な交流が、赤坂の風景、人びとの暮らしとともに新鮮な筆致で細やかに映し出されています。

1876年2月9日 とても楽しかった。行く先は、他ならぬ勝さんのお邸である。緑の丘、肥沃な畑、背景に山が重なり合った、絵のような遠景、空気も新鮮で、太陽はとても明るく輝いていたので、気分は上々だった。一層貴族的な感じのする町並みに入ると、勝邸が見えてきた。それから、しなやかな竹と香りのよい杉の並んだ広い道路を進んだ。
1878年1月31日 勝さんが、おたふく風邪をひいておられて、やわらかい肉のスープや、ブディングを届けてほしいと母にいわれた。とても喜ばれた。お遊(勝さんの3女)は、私にとってもほんとうに良い友達で、神様に感謝している。
1880年1月24日 やっと私たちの家のあるころび坂(氷川神社の北側の坂)を出発した……。

今回ご紹介した本は、港区立図書館で借りることができます(一部は赤坂図書館所蔵)
赤坂図書館で所蔵されている本だけでなく、図書館窓口、館内検索端末機やホームページで予約をすると、港区内のほかの図書館所蔵の本でも取り寄せが可能です。詳しくは、下記ホームページの利用案内から、「予約・リクエストのしかた」をご参照ください。
<http://www.lib.city.minato.tokyo.jp/>

「花ひらき、花香る、花こぼれ、なほ香る」 ——森繁久彌による墓碑銘

『向田邦子愛』 向田邦子研究会、いそづが社

向田邦子研究会は、母校実践女子女子大の教職員により発足しました。当初は5名だけだった会員も平成20年(2008)の出版当時は全国で200名以上に及びました。向田邦子と南青山を歩く、のページには「水羊羹」「眠る蚕」に書かれた和菓子屋をはじめ「隣りの神様」「父の詫び状」に出てくる「大松稲荷」「浮気」「豊長類ヒト課動物園鑑」に登場するスーパーなど文と絵入りのページが収められています。元TBSの演出家の久世光彦氏は長い年月向田作品の映像化を手がけました。彼と向田邦子の関係は、男と女でもなく、姉弟でもなく、半ズボンと短いスカートの「幼なじみ」であつたと語っています。彼女は明治の快気を持った女性で与謝野鉄幹の「人を恋うる歌」の男と女をトータルしたような人だったと評しています。台湾へは、久世との脚本化を約束した「虞美人草」の文庫本をバッグに入れ、旅立ったといひます。

赤坂青山を生きた向田邦子
向田邦子 昭和4年(1929)～昭和56年(1981)
脚本家、エッセイスト、小説家。昭和35年(1960)、雄鶏社の映画ストーリーの編集者からスタート。ラジオドラマ「森繁久彌の重役読本」(248回)で脚本執筆で腕を磨く。昭和39年(1964)のテレビドラマ「七人の孫」第1シリーズ(TBS)をホームドラマの初作品として発表。昭和45年(1970)、終の棲家、南青山に転居。クラシックとモダンが共存するこの街がお気に入りだった。久世光彦演出の「時間ですよ」「寺内貫太郎一家」と次々ヒット作を執筆。昭和53年(1978)、料理好きが高じて、妹の和子さんと赤坂に小料理屋「ままや」を開店し、平成10年(1998)まで和子さんによって続けられた。昭和54年(1979)に「阿修羅のごとく」(NHK)の脚本を書き、「かわうそ」「犬小屋」で第83回直木賞を受賞したあくる年、取材旅行中の台湾で航空機墜落事故にて死去(享年51歳)。昭和62年(1987)、優れた脚本と脚本家に「向田邦子賞」が創設される。

向田邦子さんについては、下記書籍もおすすめです
『触れもせで—向田邦子との二十年』
久世光彦著、講談社(1992)
『夢あたたかき—向田邦子との二十年』
久世光彦著、講談社(1995)
「夢あたたかき」のあとがきの中より引用 ※一部抜粋
向田邦子の中には二人の才女がいた。与謝野晶子と山崎登美子である。1人は朋友と争った鉄幹と結ばれ、歌人としても名を成し、もう1人は才能を惜しまれながら、福井の田舎で29才で夭折した。1人は髪が風に吹かれるのも怖れず、目を輝かせて奔(は)る女であり、いま1人は引込み思案で、どうしても人を傷つけることの出来ない伏し目がちの女であつた。そんな二人の女をこっそり胸の中に抱えていたから、みんなに好かれ、頼りにされ、暖かく思われ出されるのだ。これは向田邦子の幸せである。しかし、最後まで二人の女のどっちにもならなかったのが、向田邦子の人生の不幸だった——久世光彦



この体験から、被害者に寄り添う警察官の仕事に大きな魅力を感じるようになり、警察官になりたいと思うようになりました。

—警察官としてのこれまでの経験を教えてください。

警視庁に入り、まずは半年間警察学校にて教養・訓練を受けました。その後、赤坂警察署に配属され、3年間、地域課にて交番勤務やパトカー乗務を行いました。そして平成26年9月から、同署生活安全課にて、犯罪被害を生まないように防犯活動に取り組んでいます。赤坂警察署の管内には、大使館が点在しています。また、赤坂・青山地域には、多くの外国人が居住するとともに来訪者も多くいます。このため、交番勤務などを通じて英語を話す機会が多いです。海外ホームステイ経験があるので、習得した英語が役立っています。

—女性警察官特有のやりがいがありますか。

私のかつての体験のように、女性が被害者となる事件では、女性

きめ細やかな対応を心がけて 赤坂消防署 警防課 伊藤 美香子 さん

—消防官になろうと思ったきっかけを教えてください。

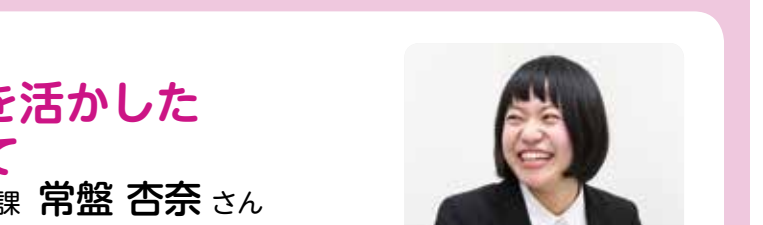
私は、学生の時から運動部に所属しており、体力には自信があったので、将来は体を動かす仕事で、できれば人のためになる仕事に就けたら良いと思っていました。そんな中、友人の付添いで行った就職説明会で東京消防庁という公安職の職種があるのを知り、ぜひ入行したいと思い、東京消防庁を受験し合格しました。

—普段のお仕事について教えてください。

私は、赤坂消防署で24時間勤務をする交替制の職員として働いています。主な仕事として、災害現場での活動がスムーズに行えるように、無線機を使って災害の状況や大隊長からの命令などを、出場(出動のこと)している消防隊に伝える「伝令」という役割を担っています。また、交代で救急隊員としても活動しています。救急現場では急病や怪我等で倒れたり具合が悪くなってしまった人に対して救命・救急処置を行い、不安を取り除きながら症状に合った病院まで搬送しています。

—まちづくりに関する女性消防官の役割とは何ですか？

私は、消防という男性の多い職場で働く中で、女性消防官として直接都民の方と接する時に、よりソフトできめ細やかな対応をすることを心がけています。救急隊員として乗務する際も傷病者の半分が女性であると



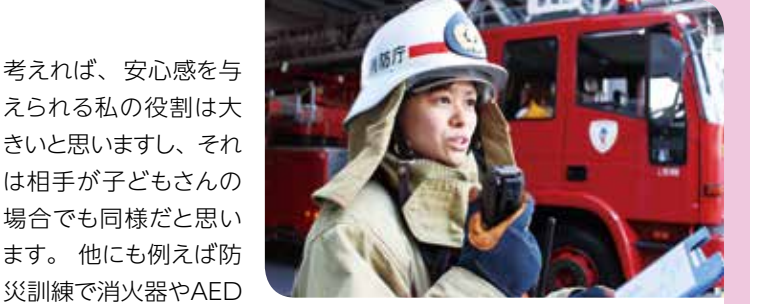
警察官が寄り添う方が、被害女性に対してより安心感を与えることができると感じています。「女性警察官がいてくれてよかった」と言ってもらえると、非常にやりがいを感じます。

—反対に、女性警察官として悩みがありますか。

男性警察官と区別されて特別扱いされたくはないのですが、現状では、男性よりも力が劣りがちなため、現場で前に出ていけないことがあります。このため、ジョギングを積極的に行い、持久力向上に努めているほか、合気道などの訓練も行い、体力をつけるように取り組んでいます。

—最後に、警察官としての心構えや今後の抱負を教えてください。

私の心構えは、常に前進し、間違いもプラスに変えるという意味で、「前向きに考える」ということ、被害者に寄り添い、柔らかさを与えられるようにするという意味で、「常に明るく笑顔で」ということです。警察官の仕事は、勤務時間が不規則であったり、危険と隣り合わせであったり、なかなかハードです。こうした中でも、自分の信念を曲げずに、地域住民の方の生活を守ることを第一に考え、まずは置かれた環境で一生懸命がんばりながら、一步一步警察官としての能力を高めていきたいです。そして、特に、女性や子どもの被害者に寄り添い、安心感を与えられる警察官を目指して、力をつけていきたいと思っています。



考えれば、安心感を与えられる私の役割は大きいと思いますし、それは相手が子どもさんの場合でも同様だと思います。他にも例えば防災訓練で消火器やAEDの使い方や地域の方々に指導する際などもわかりやすい言葉で説明をするのももちろんのこと、もしわからないことや聞きたいことがあった時に質問しやすい雰囲気を出せたら良いと思っています。最近では気軽に声をかけてくださる方も増えたのでとてもうれしく思います。10月に新しく赴任してまだ警防課長も女性で、細かなところへの気づかいなどが、とても勉強になります。

—「赤坂・青山」の好きなところはありますか？

赤坂・青山にはオシャレなお店が数多くありますが、その中でも私は泊まりの業務を終えてからランチでおいしいお店を探して食べ歩くのが趣味です。意外と路地を入った目につきにいい場所に手頃でおいしい出会いがあると思えて気分になり、疲れも癒してくれます。みなさんからもおすすめのお店があったら、教えてもらえるとうれしいです。災害がない時には庁舎見学などにも対応していますので、消防という仕事をもち身近に感じて気軽に遊びに来てくれたらうれしいです。

—最後に、消防官としてのやりがいや意気込みをお聞かせください。

消防という仕事は常に危険と隣り合わせにある大変な仕事ですが、私は人の命を助ける最前線で働けることにやりがいを感じています。一人でも多くの命を救うことを目標として日々訓練を行い、先輩たちの背中を追いかけて、志を高く持ちがんばっていきたいと思います。

最近、管内で最も多い 還付金等詐欺被害にご注意ください！

還付金等詐欺

社会保険庁や厚生労働省、区役所等を名乗り…

税金の還付金がありますので、コンビニのATMに向かってください。操作を指示いたします。

携帯電話をかけながら、ATM操作をしている人(特に高齢者)を見かけたら110番通報してください！役所が医療費や税金をATMで返還することはありません！

この他にも、犯人は様々な口でお金をだまし取るうとしています。おかしいな、と思ったらすぐに110番または、下記までご連絡ください。

●お問い合わせ／赤坂警察署 電話 03-3475-0110 (内線2612)

赤坂消防署からのお知らせ

平成27年 東京消防庁出初式を実施します

東京消防庁出初式は、消火・救助・救急演技、消防機械部隊分列行進、江戸消防記念会による伝統の木遣り行進、はしごのり、東京消防庁音楽隊カラーガーズ隊の演奏・演技など防火防災の行事として親しまれています。また、消防車両の乗車体験や地震車による地震体験など、楽しみながら防災を学ぶコーナーも用意しています。皆様お誘い合わせのうえ、ぜひお越しください。

※観客席(立見席含む)は、定員に達しますと入場を制限させていただきます。その他詳細は、東京消防庁ホームページで順次更新していますのでご確認ください。

- 日時…平成27年1月6日(火)
- 場所…東京ビッグサイト東駐車場(東京都江東区有明三丁目10番地先)

地震だ！
まづ身の安全

してますか？
家具類の転倒・落下・移動防止対策

家具類の転倒に注意

落下物に注意

家具類の移動に注意

病院へ行く？ 救急車を呼ぶ？ 急な病気やけがで迷ったら

東京版 救急受診ガイド

病気やけがの緊急度や受診する科をパソコンや携帯電話などで確認できる「東京版 救急受診ガイド」のサービスを東京消防庁ホームページで提供中

携帯電話からはこちら

スマートフォンからはこちら

※冊子版「東京版救急受診ガイド」でも確認できます。詳しくは最寄りの消防署まで

東京消防庁 救急相談センター #7119

●お問い合わせ／赤坂消防署 電話 03-3478-0119
<http://www.tfd.metro.tokyo.jp/hp-akasa/>

青山霊園眺望 ～人と歴史～

第22回
にし あまね
西 周 (1829～1897年)
1種口 第8号19側4番

島根県津和野藩邸の家に生まれる

西周は、江戸時代後期から明治時代初期の幕臣、官僚、啓蒙思想家、貴族院議員でした。明治天皇は西の功績に対し勲一等瑞宝章、男爵の位を授与。周助とも呼ばれていました。若見国津和野藩(現・島根県津和野町)の御典医の家に生まれ、森岡外は、西周の従甥にあたります。

日本人として初めてヨーロッパの地で国際法を学ぶ

19世紀に入ると、西洋の衝撃によって時代は一変します。黒船来航を機に、西洋諸国の外交を支える国際法の知識が普及します。西は、漢学の素養を身に付け、藩校・養老館で蘭学を学んだ経験から、視察のために江戸に派遣されます。そこで、西洋文化に触れ、洋学を学ぶため江戸に残ることを決意します。その後、幕府に戻り、番書調所に勤務しながら、洋学の研究を続けました。

西は研究のために海外留学の重要性を説き、徳川幕府の許しを得て文久2年(1862)にオランダへ留学することになります。そこでは、日本にまだ知られていない哲学、国際法や経済学を学習しました。西は、「国際法」は結局のところ、列強が互いに勢力の拡大をかけて鎗を削る。ヨーロッパの文明化の歴史を通じて作り出された「西洋の公法」であると学んだのです。日本が独立を維持するには、「国際法の同盟」になる必要があると痛感します。

西は後に、明治の世になると、不平等条約改正のために、自由貿易など西洋諸国の要求を受け入れ、国際社会の信用を獲得しなければならぬと説いています。

徳川政権下で各方面に尽力する

慶応元年(1865)にオランダから帰国した後、開成所の教授となり、徳川慶喜の側近として活動しながら、私塾を開きます。明治3年(1870)には明治政府に出仕して、軍制の整備に尽力し、軍人勅諭の起草に携わります。明治6年(1873)には学問について語り合ったことを雑誌に発表しよう、福沢諭吉らと共に明六社を結成し、翌年から学芸誌の先駆けとなった「明六雑誌」を発行します。

「学をなす道はまず志を立て、これに次ぐものは勉強にあり」

啓蒙思想家として、西洋哲学の翻訳・紹介など哲学の基礎を築くことに尽力し、近代日本の学術発展に努めました。代表作の「百一新論」では、西洋語の「philosophy」を音訳でなく翻訳後(和製漢語として)、「希哲学」という言葉を作ったほか、「芸術」「理性」「科学」「技術」など多くの訳語を考案しています。このように漢字の熟語を多数作っている片方では「かな漢字廃止論」を唱え、「明六雑誌」の創刊号に、「洋字ヲ以テ国語ヲ書スルノ論」を掲載しています。どちらが後の本質だったのでしょうか。西は、「学をなす道はまず志を立てるにあり」「志を立てて学問に従事すれば、これに次ぐものは勉強にあり」と述べているとおり、一生を勉学に注ぎ、啓蒙思想の普及に努めたことで知られています。

参考文献：『西周全集』(西周 宗尚書房)『近代日本人の肖像』(国立国会図書館)ほか

MYタウン

赤坂青山

AKASAKA AOYAMA

Akasaka
Aoyama
WOMAN
Style

特集 赤坂青山
ウーマンスタイル

「MYタウン赤坂青山」は、地域の人から企画・取材し、編集する地域情報誌です。赤坂青山の身近で魅力ある情報の発信を目指します



AKASAKA AOYAMA WOMAN STYLE

特集 赤坂青山ウーマンスタイル

「もっともっと輝くために」

赤坂・青山エリアには、仕事やさまざまな地域活動を通して活躍を続ける多くの女性がいっぱいます。今号の特集はそんな輝ける女性たちへのインタビューです。いろいろな困難や苦勞に直面しながらも、家族やまわりの人たちの応援を受けながら前向きに進む姿は、私たち自身にもがんばれる気持ちをくれるはず。女性だけでなく、あらゆる人へ元気の素をお届けします。



Interview #1

Mami Sano

元赤坂にすることが本当に大好き
ビジネスもプライベートもこの街といっしょ

佐野 美和さん

PROFILE さの みわ

政治家・タレント。元赤坂・青山ウーマンスタイル代表取締役。1992年ミス日本に選ばれ、TBSラジオショッピングの放送作家を経て、1995年から2001年まで八王子市議会議員として活動。現在はメディア出演のほか、赤坂で政治家のインタビューで活躍する。

—これまで行ってこれたボランティアや社会貢献の活動内容を教えてください。

まず、20代の頃はロートアクトクラブの活動をしていました。ロータリークラブの20代版のようなものです。それと、10年前からインターネットで、政治家にインタビューをする番組を配信しているのですが、あれは実はボランティアです。

—なぜオフィスを赤坂に構えたのでしょうか？

昔から仕事でTBSに行った帰りに、豊川稲荷から東宮御所の横をよく通っていたんです。その頃から「何てステキな道なんだろう」と思っていました。もちろん生まれ育った八王子も大好きで、一時は八王子に骨を埋めようとも思っていました。でも、都内に住むなら、絶対に元赤坂にしようって決めていたんです。

数年前に人生の転機があって、何をしたら良いか模索した時期があったんです。政治家スターになろうとかか、資格を取ろうとかか……。結果、以前からやっていた広告代理店業で、再勝負しようって決意しました。その時に、オフィス兼自宅として元赤坂にマンションを購入しました。

八王子は生まれ育った場所なのですが、元赤坂は自分が選んだ場所です。なので、自分の中で大事にしている街なんです。

—“赤坂・青山”にどんな印象をお持ちですか？

やはり「大人の街」ですね。それに「歴史のある街」だと思います。公園一つ取っても、歴史がありますよね。例えば、高橋は清翁記念公園とか、千代田区ですが大久保利通が暗殺された清水谷公園とか。この辺りは昔「伝馬町」と呼ばれていました。つまり馬がいたんです。そして、馬を与えられて管理していたところに、GHQが来て、自動車の街になって、政治家が来るようになって……という長い歴史があるんです。今私がいるのは、そんな長い時間の“こ

れつぽち”なんです。でも、その中で自分に何ができるのか、何が残せるか——そんなことを考えられる街だと思います。

それに、こんな都会なのにすごく緑が多いという印象もあります。「八王子のように緑はないでしょう？」とよく聞かれますが、「山はないけど、緑はたくさんあるんですよ」とお答えしています。

—赤坂の好きなところやおすすめスポットは？

たくさんあるのですが、強いて挙げるなら豊川稲荷です。“気”がとても良いですね。私に宗教はないのですが、心の拠りどころにしています。ちょっと不安だったり、これからがんばりたいなと思った時は必ず訪れています。

近所にある喫茶店にもよく行きます。昔の写真を見せていたきながら、この辺りの歴史の話を聞くことが好きですね。それに、これも近所なのですが、三島由紀夫や数々の著名人が通っていたという洋食屋さんもおすすめです。

この辺りは、こんな都会の真ん中なのに、ご近所付き合いも盛んです。酒屋さんの御用聞き文化も残っています。今の時代でも「その日にほしい」ができることも、赤坂の素敵なところだと思います。

—ご自身の活動の中で、“赤坂・青山”に影響を受けたものがあれば教えてください。

ビジネスと政治活動です。赤坂は政治にとっても関わりが深い場所なので、八王子にいてはわからなかったこともたくさん知ることができます。政治家たちのアフター5もよくわかりますよ(笑)。政治や経済の面で勢いのある方が住んでいるところなので、色んな意味で勉強になりますし、自分自身にもエネルギーをたくさんもらえます。ここにいると、自分の中のスイッチをOFFからONに切り替えられるんです。

—お住まいも赤坂ですが、プライベートは何をされていますか？

ずっとこの辺にいます。お散歩したりとか。あと、昔の映画が好きでよく観ています。この辺りがよく出てくるんですよ。例えば植木等さんのサラリーマンシリーズに、赤坂見附が映っています。まだ東京オリンピックの前で、いろんなものが建設前だったりして。そういうのを見て、ノスタルジーに浸ったりしています。

元赤坂にしていることが、本当に大好きなんです。生きていて元気な間は元赤坂にいたいなって思っています。何のために仕事をしているのかという、ここに住んで自分の好きなことをするため。そのためにがんばっているんです。

—最後に今後の活動について教えてください。

本業は広告代理店で、テレビのCMを作って売っていますが、政治家へのインタビューを続けていきたいですね。これまで400人くらいインタビューしました。永田町は全国から様々な気が集まってくる場所なので、驚きの事件や人間関係が繰り広げられます。サスペンスドラマくらいにおもしろいです。



Interview #2

Masami Ohinata

「愛することと働くこと」
強く、しなやかに子育て中のお母さんを見守る

大日向 雅美さん

南青山で育児を支援している施設「子育てひろば〈あい・ぽーと〉」の施設長で、心理学者の大日向雅美さんに、結婚した女性が働き続けることについてお話をうかがいました。



Interview #3

神田 織音さん
現代のさまざまな社会問題を語る

—もともと織音さんはお芝居をずっとされていたそうですが、どうして講師になると思ったのですか？

芝居に携わって10年近く経過した時点で、先の見通しが立たない状態でした。将来的なことも考え焦り出した頃に、自分が使っていた芝居小屋で現在の師匠（神田香織）が講演の独演会をしていたのです。そこで講演というものを初めて知り、師匠に出会い

今の大日向さんがいるのは

大日向さんが結婚したのは約40年前、まだ彼女が大学院生だった時のことでした。当時、女性は夫のために内助の功に務めることが普通とされていました。大日向さんの結婚披露宴でも、来賓のスピーチの大半が「ご主人のために、新婦は1日も早く研究をやめて良い奥さんになることを望む」だったそうです。大日向さんも結婚する際、ご主人に「もしあなたが望むなら、大学院をやめてもいい」と長い手紙を綴ったそうです。ところがご主人のお返事は「僕は一生、あなたを幸せにするように努力する。だからこそあなたには自分の人生、やりたいことができなかったという想いだけはしてほしくない。あなたが研究を続けることを僕は結婚の条件とする。その代わり、僕は全力であなたの研究生活に協力する」—そんなご主人の言葉と、当時の指導教授の勧めもあり、研究と子育てを続ける決意をしたそうです。大日向さんは「今思うとなんと志の低いことだったかと反省しますが、若い時は働く意義や喜びへの認識に欠けていました。それに気付かせてくれたのが夫でした。夫と出会っていなかったら、全く別の道を歩んでいたかもしれません」とまでお話しされました。そして、「これからは要介護の身となった夫へ恩返しをするのが私の務めと思っています」と、愛情深い表情でお話くださいました。

“赤坂・青山”で働くこと

赤坂・青山の街の印象は、「すごくオシャレでアップテンポな街」だそうで、一般的な私たちの持つ印象と大きくは変わりませんが、子育て支援施設で働かれているからこそその視点で見えるものもま

ました。師匠は女性で当時まだ40代。結婚や子育てを経て、講演を続けている姿に憧れました。

初めて聞く講話は、まるで一人芝居のようで、これまで勉強してきたことが活かせるのではないかと考え、思い切って入門しました。

—講話のテーマに、成年後見制度や認知症、遺言、相続、防災など、身近な問題を取り上げていらっしゃいます。始められたきっかけ、経緯をお聞かせください。

最初は仕事で依頼されたからでしたが、師匠の影響が大きかったと思います。師匠は、古典講義ばかりでなく、社会問題を扱った新作講話を語っておりまして、入門当初から「自分の代表作になる講話を作りなさい」と指導されてきました。私も、そのつもりで講話の題材になりそうなテーマはないか、アンテナを張っておりまして、なかなか出会えずにいました。ところが、ある新聞で取材を受け、「生涯かけて語れる講話のテーマを探しています」というような記事を書いていただいたんです。これを見てくださった方から、「ぜひ成年後見制度の普及講話を作ってください」と依頼を受けました。認知症や遺言相続、防災のお話は、この成年後見講話をきっかけにご依頼をいただきました。

赤坂・青山地区では、区からも地域住民の方に知ってもらいたい情報がたくさんあり、広報もしっかりなさっているのですが、やはりどうしても堅苦しくなりがちです。そこで、講話を使って情報提供をしたらどうかということが発端だったと思います。特に、

た、あるようです。「赤坂・青山のお母様たちはどの地域のお母様たちとも何ら変わらない悩みを持っておられます。でも、土地柄もあって、いつも綺麗にして当たり前といった風潮もあるのでしょう。外見と内面とのギャップに疲れている方も少なくありません。他の人がいつも生き生きとしているように見えるからこそ、育児や家事に追われて、孤軍奮闘しているのが自分だけのように思えて、内心悩みを深めているとお声にもよく接します」とのことでした。赤坂・青山という土地柄の中で育児をするお母様たちには、全国共通の悩みと、この地域ならではの悩みの両方を持つ人が多いようです。

地域で見守る“赤坂・青山”での育児

NPO法人あい・ぽーとステーションでは、老若男女共同参画で地域の育児力を向上させることをめざして、子育て・家族支援者養成講座を実施しています。子育てや仕事が一落した中高年世代を中心に、地域の人々がこの講座を受講し、あい・ぽーとの施設内の一時保育や港区内の子育て家庭などに外出して、子育て支援に活躍してほしいと、赤坂・青山は地域の親や子育て家庭のために尽くしたい」と思う方が多いそうです。「とてもクリスタルで非日常的な印象のある街の中に、若い子育て世代を暖かく見守ろうとする中高年の方々の温かな息遣いが感じられる街です。それもあって、赤坂・青山は、人としてのインテリジェンスに充ちたてきな街だと思います」そうおっしゃいました。

女性として働く上でのモットー

大日向さんが女性として働く上で大切にしていること。それは、精神分析学者のフロイトが「成人の要件は？」との質問に答えた言

赤坂は芸者さんが残っている街ですから、「和」の伝統話芸に目をつけていただいたのだと思います。

—織音さんがお考えになる“女性としての生き方”を教えてください。

仕事でも私生活でも、“女性であること”を意識している場合とそうでない場合があります。講話の世界は、現在男女比がおおよそ半々ですから立場は対等ですし、私生活では、夫婦共働きなので家事も「できる方がやる」というやり方で、特に“女性”を意識していない環境にあります。しかし仕事では、“女性であること”を意識したご依頼もありますし、出産や育児では、男性に代わってほしくても代わってもらえない現実があります。そんな時に、いつも支えというか、解決の糸口になると思うのは、「こちらの立場になって考えてくれる理解者」の存在です。

おかげさまで、家族や仕事先の方などご理解くださる方に恵まれ、仕事も育児もさせていただいておりますが、自分でも心がけていることは、それ（理解してもらえること）を“当たり前”と思わないことです。やはり、本来自分がやらなければならないんだという意識があるんですね。家事や育児は、女性の役割だと意識している部分が。しかし、どうしてもそれをできない時に、「女性も仕事をする権利がある」とか「女性ばかりが育児をするのはおかしい」というとらえ方ではなく、「仕事をしたいという気持ちを理解してくれる方のおかげで仕事ができる」「育児をサポートしてくれる方

業「愛することと働くこと」。「働くことは、自分の培ったものを社会に還元し貢献することでもあり、一方で、自分の愛する家族を守ることもあります。愛することと働いて経済的に自立することの大切さは男女の違いを越えて大事にしていきたい」とお話しいただきました。

最後に

女性が家庭と仕事を両立しながら活躍していくにはどうすればよいのかをうかがいました。「今、女性を支援する制度は徐々に整いつつあります。だからこそ改めて女性の意識改革が必要ではないでしょうか。男性並みに働くことと肩肘張る必要もないと思います。が、一方で女性であることに甘えることも償いべきでしょう。むしろ人としてどう生きていくかを見つけることが大切。社会の中で働いていると、思い通りにいかないことも少なくありません。けっして諦めずに、芯を持ちつつも、ときには我慢をしたり、妥協したり、すぐに結果を出そうと焦らずに待つ柔軟さもここがけながら、しなやかに生きる強靱さが今後大事になると思います。そうした力を発揮するために、愛する人の支えが大切ですね」

若い世代の女性たちへの熱い想いを語ってくださった大日向さんですが、その背後に、全力で彼女をサポートされた優しいご主人の姿が重ねて見えました。



PROFILE おおひなた まさみ

心理学者で恵泉女学園大学大学院平和学研究所教授。「子育てひろば〈あい・ぽーと〉」（南青山2-25-1）施設長。1970年代から母親の育児ストレス等の研究に取り組み、多数の関連著書出版。厚生労働省・社会保障審議会委員（児童部会長）等。

のおかげで仕事をさせてもらえる」ととらえることで、女性として生きやすくなっていると思います。

—“赤坂・青山”で好きなところや思い出の場所はありますか？

15～20年前でしょうか。当時、アルバイトを掛け持ちしていた、信濃町から六本木までよく歩いておりました。外苑東通りから乃木坂、防衛庁前と。国立新美術館が開館する前です。青山ツインビルから乃木坂までは、ちょっと懐かしい感じの街並みだったと記憶しています。また、どんな方が住んでいるのかと考えていました。夢を持ってがむしやらだった頃なので、その頃の街並みや、街を歩きながら考えていたことが、今でも忘れられません。

—これから講話を通してどんなことをしたいですか？

講話は400年以上続く伝統話芸です。その良いところを活かしながら、これからの時代に受け入れられる講話の話や形などを探って、今後も長く継続していきたいです。

PROFILE かんだ おりね

1999年に神田香織に入門、その後前座となる。2003年に二ツ目、2011年に真打昇進。メディアを通して、社会問題・福祉などのテーマを講話でわかりやすくPRしながら、赤坂・青山で多く出演し、全国で活躍中。



赤坂・青山で活躍する女の子、赤坂親善大使のリーダー、アユミンにインタビューしました！

—生い立ちを教えてください！

平成24年2月に、全国からのたくさんの応募の中から、アカサカメン、アカオくんと一緒に生まれたの。リーダーを決めるための赤坂親善大使総選挙であたしが選ばれたのよ。帽子は赤坂をイメージして、とってもお気に入り。体は赤坂の「A」と「人」という字になっているわ。アユミンという名前には、「みんなと一緒にこの街を歩みたい」という願いが詰まっているのよ。

—最近はどうな活動？

活動を始めた頃は、区の施設を中心とした出演が多かったけど、だんだん親善大使を知ってくれている人が増えて、ホテルや商店街のイベントからも声がかかるようになったのよ。なかでも「ドイソクイズ大会」で、ご当地キャラ界のスター、くまモンと共演できたことがうれしかった！ 壇上から降りる時にくまモンが手を差し伸べてくれて、紳士的だったのが素敵だったわ。岐阜県郡上市との交流イベント（郡上おどりin青山）では、青山の歴史を感じながら、区外の人々にこの地域を知ってもらおうきっかけになったと思うわ。ケーブルテレビの番組に出演して、ご当地TVズに参加したのも楽しかった活動よ。

—出演が増えて、うれしかったことは？

もちろん、一人でも多くの人に私たちの大好きな赤坂や青山を知ってもらえる機会が増えたことが一番うれしいわ。それに、がん

ばってPRしたおかげで、協働推進課のみんなと同じ名札をもらうことができたのよ！ 今後は、職員のみんなといっしょに、地域のためにがんばっていこうと決めたの。

—女の子から見た、赤坂・青山の魅力って？

たくさんあって伝えきれないわ！ アカオくんは神社やお寺が好きって言っているけど、やっぱり女の子としては、青山のオシャレなお店を見たり、赤坂の憧れの芸者さんに会えたりできることが魅力かしら。音楽や芸術も盛んな街だし、素敵な場所をみんなにたくさん紹介したいわ。幅広い世代に楽しんでもらえるところなのよ。

—今後の活動について教えてください！

たくさんイベント出演が決まっているわ。私たちのイベントや、これはまだヒミツなんだけど、新しいグッズ展開も企画しているみたい…。

私たちの活動は随時Facebookの公式ページでもアップしているから、ぜひのぞいて見てね！ いろいろな場所でみんなに会えるのを楽しみにしています！

Facebook <https://www.facebook.com/akasakashinzentaishi>

平成27年2月、赤坂親善大使 誕生月イベント決定！

詳しくは裏面をご覧ください。

「赤坂青山ウーマンスタイル」はまだまだ続きます。裏面には、女性警察官と女性消防官のお話のほか、図書館で読むことができます。ぜひご覧ください。